

市長講演 第5集
「笑顔が輝き 夢と魅力あふれる 未来創造都市」
の実現に向けて

本書は、令和元年10月24日、大分経済同友会の10月例会で行われた佐藤市長の講演をまとめたものです。

市長就任からのさまざまな取組や、今後の市政運営方針についての市長の思いが述べられています。

佐藤市政への理解の一助としていただければ幸いです。

令和2年3月

企画部 広聴広報課

大分市長 佐藤 樹一郎

「笑顔が輝き 夢と魅力あふれる 未来創造都市」
の実現に向けて

【開催日】令和元年10月24日

【場 所】トキハ会館 5階 ローズの間

【 目 次 】

はじめに	1
大分市の人口動態	1
市政運営のキーワード	3
創造1 誰もが安心して笑顔で暮らせる社会の創造	
■災害に強いまちづくりの推進	3
■子ども・子育て支援の充実	6
■教育のさらなる充実	8
■高齢者・障がい者福祉の充実	9
創造2 産業力の強化による活力の創造	
■国内有数の「産業都市大分」	10
■農林水産業の活性化	13
創造3 次なる時代を見据えた新たな魅力の創造	
■大型イベントの開催	13
■魅力あふれる中心市街地の創造	17
■地域の個性を活かしたまちづくり	18
■広域交通ネットワークの強化	18
おわりに	20

【 はじめに 】

皆さま、こんにちは。本日は、大分経済同友会の10月例会にお招きいただき、誠にありがとうございます。大分経済同友会の皆さまには、大分市政の推進にご支援、ご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

また、先日ラグビーワールドカップ2019大分開催の全5試合が終了しました。皆さまから多大なるご支援、ご協力をいただき、そして、さまざまな取組により大成功に終わったと思っています。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

さて、本日は『笑顔が輝き 夢と魅力あふれる 未来創造都市』の実現に向けて」と題し、大分市の課題や現在の取組についてご紹介させていただきます。

【 大分市の人口動態 】

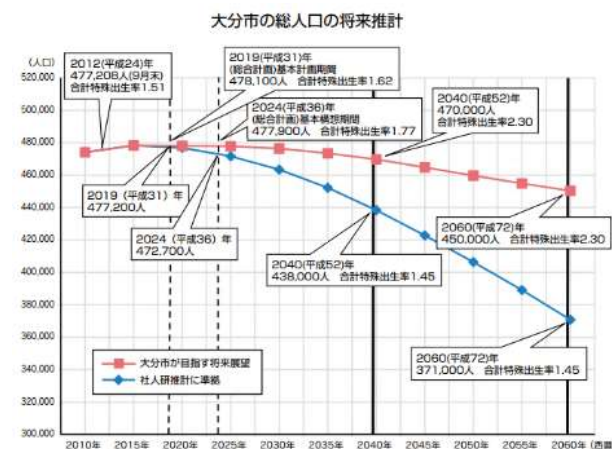
大分市はこれまで、全国1,718市町村のうち、人口が伸びる都市の一つでありましたが、平成30年に初めて人口が減少に転じ、令和元年は出生者数と死亡者数の差を示す「自然動態」が331人の減少となり、ついに大分市も人口減少社会の波に直面することとなりました。

大分市の人口は現在約48万人で、出生者数が約4千人です。現在生まれてくる子どもたちが100歳まで生きると仮定しても、将来の人口は約40万で、現在より8万人減少することとなります。いずれにしても少子高齢化の影響により、人口減少局面を迎えています。

次に、転入者数と転出者数の差を示す「社会動態」について、県内他市町村との人口移動の関係を見ますと、別府市からの転入が最も多く、全体で1,316人の転入超過となっています。大分県外との人口移動については、福岡県や東京都などの関東圏への転出が多く、全体で1,249人の転出超過となっています。そのうち「20～24歳」の年齢区分が最も多くなっており、これは県外の大学などへの進学のためと考えられます。大分にもそうした高等教育の場が必要であるのと同時に、卒業後に地元で活躍できる場をつくることも必要だと思っています。

国立社会保障・人口問題研究所の人口将来推計によると、大分市の人口は2060年に約37万人まで減少すると予測され、現在の人口を維持するためには、合計特殊出生率が2.3程度必要です。そのため、子育て支援の充

実はもちろん、高齢者や障がいのある方が元気で活躍できる社会をつくり、子どもを産み育てたいと思う若者を



《 大分市人口ビジョン 》

増やす取組が重要だと思っています。

【 市政運営のキーワード 】

市長就任時から掲げている「3つの創造・連携・実行」という市政運営のキーワードがあります。この3つの創造の中の1つ目「誰もが安心して笑顔で暮らせる社会の『創造』」が基礎自治体としての大分市の究極の目的であり、その実現のため、2つ目「産業力の強化による活力の『創造』」、3つ目「次なる時代を見据えた新たな魅力の『創造』」の順に、活力と魅力あるまちづくりを進めていくことが重要だと思っています。

【 創造1 誰もが安心して笑顔で暮らせる社会の創造 】

■災害に強いまちづくりの推進

災害についてですが、令和元年10月に発生しました台風19号は想像を超える規模で、大変な災害となりました。こうした大規模な災害が発生すると、これまで進めてきたまちづくりの全てが水の泡となるだけでなく、最悪の場合、尊い人命が奪われてしまいます。大分市においても、ソフト・ハードの両面から災害に対するさまざまな取組を進めているところです。

まずソフト面では「わが家の防災マニュアル」を改訂し、平成30年

3月に全戸配布しました。その中の「いざという時の行動編」では、風水害あるいは津波発生時の避難行動などについて詳細に掲載しています。もう一方の「事前の備え編」では、家の中での家具の安全な配置や転倒防止の措置、日ごろからの備蓄などについて掲載しています。

また、近年は特に浸水が多く発生していますことから、「大分市洪水ハザードマップ」の更新版を作成しました。これまでの洪水ハザードマップは、百年に一度の洪水が発生した場合の浸水想定でありましたが、今回更新したものは、想定し得る最大規模の降雨が発生した場合の浸水を想定し、その場合の避難先などについて掲載しています。これを令和元年8月に浸水想定区域を含む367自治会へ配布していますので、ぜひご覧いただき、備えをしていただくことが重要だと思っています。

さらに、例えば足が不自由などの理由で、避難したいけれども避難することができない避難行動要支援者の



◀ 大分市洪水ハザードマップ ▶

方々の対応についても検討を続けており、そうした方々の名簿をプライバシーに配慮しながら作成し、いざという時には地域の自主防災組織等の皆さまがスムーズに情報伝達や安否確認を行えるような連絡体制を整えているところです。こうした体制や地域力を構築する取組を進めていくことが重要だと思っています。

ハード面の整備も進めており、その一例として「三佐命山」が平成31年3月に完成しました。今後、南海トラフ地震が高い確率で発生することが予測され、地震発生から津波到達までに、1時間程度の猶予があると見込まれていますが、この三佐命山は松原緑地に隣接しており、周囲に高いビルがあまりありません。そこで、地域の皆さまと相談し、普段は緑あふれる緑地で子どもたちを遊ばせることができ、いざという時には600人が避難できる、見晴らしのよい高台をつくりました。頂上部分には倉庫を設置し、簡易トイレやテント、数日分の水などを備蓄していますので、津波で押し寄せた水が引いてから、安全な避難所へと移動することができます。

大分川については、大分川ダムの完成により、災害時の河川の水位がこれまでと比較して60センチメートル程度下がりました（七瀬川胡麻鶴地点／平成30年台風24号時）。一方、大野川については、堤防の下部が洪水により洗掘され傷んでいる箇所や、これまでの度重なる降雨により、上流から土砂などが流され、川底が上昇している箇所などがあります。そのため、国土交通省へ出向き、特に大野川や乙津

川の砂州のあたりなど、今回の台風19号と同等の規模のものが襲って来たときに、川が耐えることができるかという観点から、改めて見直しをしていただくようお願いしてきました。

こうしたさまざまな取組を、今後も続けていく必要があると思っています。

■子ども・子育て支援の充実

大分市の待機児童数は、463名（平成29年4月1日時点）と全国的に見ても待機児童数の多い都市の一つでありました。女性が働くことのできる場所や機会が多く、女性の働く意欲の高い都市は、待機児童数も多い傾向にあり、ある意味では大分市の活力を反映しているのかもしれませんが、しかし、子どもを預けたいときに預ける場所がないというのは問題ですので、待機児童数をゼロにするための取組を進めています。

8,699人（平成27年4月1日時点）であった認可保育所等の定員を徐々に拡大し、11,097人（平成31年4月1日時点）になりましたが、こうした整備の進展により、新たに子どもを預けて働きたいというニーズが高まり、特に1歳、2歳の子どもを預けたいという希望が増加しています。保育所は、年齢別に部屋が分かれているため、全体数は足りていても、1歳、2歳の部分が不足しているといったことが発生しています。

また、令和元年10月からは、保育所や幼稚園などにおける3歳以上の児童の利用料や保育を必要とする場合の幼稚園での預かり保育、認可外保育施設などの利用料の無償化がスタートしました。当然のことながら、ますます子どもを預けて働きたいというニーズは高まりますので、さらなる定員の拡大が必要となります。保育所の新設や新たな保育所の認可などには時間を要するため、一気に定員を拡大することはできませんが、令和2年には364人、令和3年には422人の定員拡大を図り、待機児童を何とかゼロにしたいと思っています。

それから、最近の児童虐待に関するニュースの際などによく取り上げられる「児童相談所」の状況について、大分は現在、県が児童相談所を一手に引き受けています。しかし、全国的な議論の流れや児童虐待対応を行う現場の方々からも、より迅速な対応を行うため、大分市内は大分市が児童相談所を設置して対応し、その他を県が引き受けるという体制にすべきではないかという議論があります。全国の中核市のうち、兵庫県明石市をはじめ、いくつかの都市が児童相談所を設置しています。九州では鹿児島市が児童相談所を設置する方向で検討していますので、大分市も県と連携し、児童相談所の設置に向けた検討を行っています。

児童相談所には「介入」の機能があり、いざという時に子どもたちを守るため、家庭内へ踏み込み、一時保護する権限があります。大分市では子ども家庭支援センターを設置していますが、そこまでの権

限はありません。相談を受けることなどはできますが、危険と感じたら児童相談所に通報し、対応してもらうという体制になっています。

児童相談所を設置するためには、まず子どもたちを守る体制をしっかりと整える必要があります。そのため、社会福祉士等の資格を持つ大分市の職員を児童相談所に派遣し、ノウハウや経験の習得を図っているところです。また、児童福祉法によると児童相談所には、必要に応じて一時保護所を設置することが規定されています。大分市で児童相談所を設置した際には、当面は県と共同で運営するなど、さまざまな取組方法を検討しているところです。いつまでに設置するというスケジュールありきではなく、大分の子どもたちを守ることのできる体制をしっかりと整えることが重要だと思っています。

■教育のさらなる充実

英語教育やプログラミング教育の必修化や経済的な理由により修学が困難な方々に対応するため、外国人の「ALT（アシスタント・ランゲージ・ティーチャー）」の増員や給付型奨学金「未来自分創造資金」の拡大などに取り組んでいます。

また、インターネットを使ったいじめなど、これまでにはなかったいじめが増加しており、教職員だけでは対応できないケースも多くあるため、心理学の専門家の「スクールソーシャルワーカー」を増員し、対応しています。

さらに、近年は猛暑により、エアコンを設置しなければ学習環境にも影響が出るようになりました。市立小学校の普通教室へのエアコン設置は、令和2年までかかる見込みでしたが、事業者の皆さまのご尽力により、2学期中に全ての小中学校の普通教室にエアコンが設置されました。市立幼稚園についても、令和元年度中に設置を完了させる予定です。

こうしたさまざまな取組により、教育環境の充実を図っています。

■高齢者・障がい者福祉の充実

今後ますます高齢化の進展が見込まれる中、介護の分野においては、要介護3未満の介護度の方は、可能な限り在宅で対応していただくような流れになってきています。医療の分野においても同様に、入院が必要不可欠な方以外は、自宅で療養していただくような流れになってきています。そうしますと、家庭の負担がどうしても高まりますので、在宅での介護や療養をサポートするため、市連合医師会にご協力いただき、「大分市在宅医療・介護連携支援センター」を設置するなど、地域包括ケアシステムの構築に取り組んでいます。

また、認知症の高齢の方や障がいのある方の権利をどのように守るのかということも重要な課題です。大分市では成年後見制度の利用を促進するための「大分市成年後見センター」や障がいのある方が住み慣れた地域で、安心して暮らし続けることができるように、さまざま

な相談を受け、緊急時の見守り機能を備えた「大分市障がい者相談支援センター」を設置しています。

それから、より質の高い医療を提供するため、ICTを活用した医療情報などを医療機関の間で共有する仕組み「大分市地域医療情報ネットワーク」を、医師会の皆さまをはじめ、多くの方々に参加いただき、整備を進めています。臼杵市において、「うすき石仏ねっと」という先進的な事例があり、患者の医療情報をカードに入れ、異なる医療機関の間で共有できるような仕組みをつくっています。このような取組は、大分市を含め県全体でも必要であると思います。

【 創造2 産業力の強化による活力の創造 】

■国内有数の「産業都市大分」

大分市は国内有数の産業都市で、平成30年工業統計調査によると、製造品出荷額等で九州1位、全国でも14位と、今後ますます伸びていく可能性を秘めた都市だと思います。

企業立地の状況を見ますと、情報処理関連の企業や半導体関連の企業が大分支社を開設したり、製造工場を新築移転したりしています。全体的にサービス・情報関連の企業が数多く立地してきていますが、コールセンターなどの女性が活躍できる企業も増えてきている状況です。

医療や福祉、ロボット、自動車、IT、それから世界的に地球環境が

問題視される中、水素社会実現のための産業など、これからの成長産業を伸ばし、大分市に集積していくことが重要です。そうした取組の一つとして、大分市では自動運転車両の実証運行を行っており、令和元年で3回目となります。自動運転車両はまさにロボットと自動車、IT、そうした技術が一体化されたものだと思います。

ラグビーワールドカップ2019大分開催の期間中、大分トリニータが大分市営陸上競技場で競技していましたので、「eCOM-10」という自動運転車両で、JR大分駅南口から大友氏遺跡多目的広場まで観客を輸送し、そこからはシャトルバスで競技場まで移動していただきました。また、大分バス株式会社さんにご協力いただき、大分市美術館や大分県立美術館、大分城址公園などを通る中心市街地循環バス「大分きゃんバス」のルートで、自動運転車両を走行させました。安全対策を十分に行い、多くの市民の皆さまにご乗車いただきました。わたしも乗車し、自動運転の技術はもうほとんど実用レベルに達していると感じました。ちなみに、自動運転車両を大分市で1台購入しましたので、今後は中心市街地だけでなく、郊外を走行させるような実験も行いたいと考えています。

こうしたものが将来、例えば高齢者の運転免許返納後の交通の足の確保といった社会問題の解消や南蛮BVNGO交流館、大分城址公園、祝祭の広場といった中心市街地の魅力的な場所などをめぐる遊覧バスとして使用することができるようになるのではないかと思います。

おそらくこれから5年から10年程度の間、公共交通機関の中にも、こうした技術が入ってくると思いますので、民間事業者の皆さまにもご協力いただきながら、実験を重ねていくことが重要だと考えています。

また、次世代モビリティに関するシンポジウムの際には、自動運転技術の開発などに携わる国立大学法人群馬大学の小木津武樹先生と株式会社シンクトゥギャザーの宗村社長に、大分での産業面における可能性として、自動運転車両の設計や部品の作成については群馬大学とシンクトゥギャザーで行い、組み立てて完成車にする工程を大分で行う、いわゆるノックダウンが可能なのではないかというお話をいただきました。例えば、自動車整備に携わる方や特殊車両の製造を行う方などは、非常に高い技術を持っておられますので、今後ノックダウン自身が大きな産業になる可能性もあると思います。

それから、大分市内には「キラリと光るものづくり企業」が数多く立地していますので、各企業の優れた技術や製



《 自動運転車両実証運行 》

品を紹介し、販路拡大や企業間連携を促進する目的で、「おおいたものづくり企業ガイドブック」を配布していますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

■農林水産業の活性化

農林水産業においても、将来に希望が持てるよう「おおいた農業塾」の実施や農業参入企業への補助制度などにより、新たな担い手の確保や育成に取り組んでいます。

また、地元農水産物の消費拡大のため、「りゅうきゅう」や「にら豚」のPRを強化し、九州内のローソンでにら豚関連商品を販売していただきました。

それから、レストランや食堂の皆さまにご協力いただき、大分の食材と食文化を融合させた新たなおもてなし料理「豊後料理」を創作しました。ラグビーワールドカップ2019大分開催の期間中には、国内外から訪れた多くの方々に、すばらしい料理を提供できたと思います。

【 創造3 次なる時代を見据えた新たな魅力の創造 】

■大型イベントの開催

ラグビーワールドカップ2019大分開催の期間中、ウルグアイ、フィジー、フランスの代表チームが、豊後企画大分駅原球技場を練習グラ

ウンドとして使用しました。ラグビーの聖地とも呼べるこの球技場を、ラグビーワールドカップを契機に改修し、きれいに整備できたことを嬉しく思っています。ちなみに、フィジー7人制ラグビーの代表チームが、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの事前キャンプをここで行うことが決まっています。

祝祭の広場には、現在約30万人の方々が訪れ、日本代表チームと南アフリカ代表チームの試合のパブリックビューイングを行った際には、約5,000人の方々が集結し、大変な盛り上がりとなりました。広場ではメインスクリーン以外にも、木製のテーブルや座席を用意し、小さなスクリーンを配置しました。そこでビールなどを飲みながら観戦できるようにしましたので、多くの方々が集まりやすい環境を整えることができたと思います。また、オープニングセレモニーには、大分市観光大使の指原莉乃さんも駆けつけ、ラグビー元日本代表の今泉清さんと対談も行いました。

祝祭の広場は「集い」「憩い」「祝い」の機能を備えた広場として整備を



◀ 祝祭の広場 パブリックビューイング ▶

行いましたが、その中の「憩い」の機能が備えられているだろうかと心配していました。しかし、広場の傍らで、親子がラグビーボールで遊ぶ光景を目にし、「憩い」の機能もしっかりと備わっていると感じました。イベントのないときには、ベンチで読書をしてもらうなど、そうした「憩い」の機能もまた発揮できると思います。

わたし自身は、大分市でキャンプを行ったウルグアイ、フィジー、フランスの駐日大使やラグビー協会の皆さまなどをおもてなしするため、歓迎レセプションの開催や市内各所のご案内などを行いました。

また、ワールドカップ開催期間中には、さまざまなイベントが同時開催されました。

まず、昨年に引き続き、障がいのある方もない方も一緒に楽しむことができるスポーツと文化の祭典「スポーツ・オブ・ハート in OIT A 2019」が開催されました。シドニーオリンピックの女子マラソン金メダリスト高橋尚子さんによる陸上教室や中央通りでのノーマイルズ駅伝、ファッションショー、音楽ライブなど、さまざまなイベントが行われました。

その際、歌手のMay J.さんにもお越しいただき、大勢の観客の前で「NO SIDE」を歌っていただきました。この「NO SIDE」という曲は、ラグーマンに対する応援歌であると同時に、サポーターやラグビーファンに対する応援歌でもあると思います。そうした気持ち

を汲み取り、十分に理解して歌っていただいたことを非常に嬉しく思いました。中心市街地の商店街などでこの曲を流していただき、歓迎レセプションの際にもこの曲を流しましたところ、ラグビーの精神が表現された大変良い曲だと言っていただきました。万国共通でこうした気持ちは伝わるのだと感じました。

それから、大分アートフェスティバル2019「回遊劇場 SPIRAL」を開催しました。大分市を訪れる国内外の方々をおもてなしするため、店舗のシャッターを活かしたアートやJ:COMホルトホール大分のガラス面を活かしたステンドグラスのようなアート、大分合同新聞本社の使用されなくなった印刷室を活かしたアートなどでいっば

いにしました。平成30年も、国民文化祭・障害者芸術文化祭において「回遊劇場～ひらく・であう・めぐる～」を開催しましたが、今回は

より多くの方々を巻き込みたいという思いから「回遊劇場 SPIRAL」と題していま

す。大分市では

これまでも

「おおいたト

イレンナーレ
2015」など、ア
ートを活かした
まちづくり



◀ スポーツ・オブ・ハート in OITA 2019 ▶

を進めてきました。そうしたアートがまちの中に蓄積されていくと、すばらしいまちの魅力になるのではないかと考えています。

そして、大分城址公園では、「おおいた食と暮らしの祭典」の他、仮想天守イルミネーションにあわせた庭園のライトアップや府内戦紙の山車展示、郷土芸能のステージイベントなどを開催しました。

■魅力あふれる中心市街地の創造

これからの中心市街地のまちづくりにおいて、大分駅東側の22街区、54街区の整備や荷揚町小学校跡地の利活用などは、現在さまざまなご提案をいただいております。まちの骨格となる重要な計画だと思っています。また、JR大分駅西側の末広町一丁目地区の再開発についても、大分で民間が主体となって実施する再開発事業はまだ例がありませんので、ぜひ成功させていただきたいと思っています。

大友氏遺跡の整備はかなり進んでおり、来年の春には庭園が復元できる予定です。大友館の復元はまだこの先10年程度かかるかもしれませんが、古文書や発掘調査などにより、どんなものであったのかがおおむね明らかになってきましたので、可能な限り史実に忠実に復元をしたいと思っています。中心市街地の北側に府内城、南側に大友館という江戸時代と中世戦国時代の両方が再現できると、より一層魅力あふれるまちになるのではないかと考えています。

■地域の個性を活かしたまちづくり

中心市街地ばかりではなく、それぞれの地域においても、多くの魅力的な場所や重要な計画があります。

例えば、野津原地域では、大分川ダムが完成しました。ダムの建設にあたり、材料となる土を付近の山から切り出しましたので、その跡地を活用した多目的広場「(仮称) のつはる天空広場」を建設する予定です。大分川ダムを核とするこの一帯が、観光振興の拠点や市民の憩いの場、そして、新たな賑わいの場になるとよいと思っています。また、大南地域においては新たにスポーツ施設を、佐賀関地域においては、関崎海星館にプラネタリウムを整備する予定です。

そうした地域ごとの魅力や特性を踏まえ、「地域まちづくりビジョン」に基づくさまざまな取組を進めています。

■広域交通ネットワークの強化

新幹線ネットワークについては、現在整備中の路線が完成した後、基本計画路線の東九州新幹線と四国新幹線をぜひ整備計画路線に格上げしていただくため、国土交通省や県などの関係機関と相談を続けています。今後もシンポジウムなどを開催し、整備に向けた機運を盛り上げたいと思っています。

高速道路ネットワークについては、山口県下関市と福岡県北九州市を結ぶ第3の関門道「下関北九州道路」が以前話題となりましたが、

この下関北九州道路には、国土交通省の予算が調査費として付いています。国土交通省九州地方整備局によりますと、福岡県と山口県、北九州市、下関市の4者が一緒になって国土交通省に陳情したため、予算が付いたとのことです。大分市も県や愛媛県などと一緒になって働きかけするなどの取組が必要だと思っています。

また、中九州横断道路の犬飼・竹田間が開通し、竹田・阿蘇間の事業化が決定しました。犬飼から宮河内を通り、国道197号に接続すると、九州と四国の高速ネットワーク網をつなぐことができます。これは一般的に豊予海峡ルートと呼ばれますが、下関北九州道路と同様、「豊後伊予連絡道路」という正式名称がありますので、そちらで呼んでいただきたいと思います。

こうした取組を、特に県と一緒に頑張って勉強していますが、四国側とも行う必要がありますので、今年9月に愛媛県の市長会にお願いし、市長会の皆さまや八幡浜市、松山市などの市長と話をしてきました。

大分と愛媛が道路でつながると、大分を訪れた観光客が、陸路で愛媛まで行き、愛媛の観光地も楽しむことができます。また、愛媛から大分に渡り、そこから中九州横断道路で熊本まで向かうことができれば、第2国土軸の道路版と言えるのではないのでしょうか。そうしたことから、2つの高速ネットワーク網が一体になることは、非常に重要だということについて、熱心に話を聞いていただきました。

それから、こうした提案を九州市長会の要望書を通じて全国市長会

へ提出し、国にも届くようにしています。

すぐに状況が変わることは難しいですが、引き続き県と連携しながら取組を進め、愛媛県の各市町との交流もさらに推進したいと思います。

【 おわりに 】

以上のとおり、大分市の課題や現在の取組をご紹介させていただきましたが、「笑顔が輝き 夢と魅力あふれる 未来創造都市」の実現のためには、各種施策を着実に実行していく必要があります。

今後とも皆さまのご指導、ご支援、ご鞭撻をいただきながら、さまざまな取組を進めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。本日はご清聴ありがとうございました。

市長講演／令和元年度

編集・発行／大分市企画部広聴広報課

☎ 537-5601